

登場人物

橘真理・たちばなまり	……	龍治を慕う娘
轟龍治・とどろきりゆうじ	……	売れないコメディアン
南条小百合・なんじょうさゆり	……	大女優
崎山・さきやま	……	龍治が所属しているプロダクションの女社長
西野・にし	……	崎山の部下
米倉・よねくら	……	龍治と同じ崎山プロダクションのタレント
権藤・ごんどう	……	芸能週刊誌の記者
初江・はつえ	……	真理の親友
修・おさむ	……	龍治の相方
由香・ゆか	……	龍治のファン
忍・しのぶ	……	由香の友達、龍治のファン
富倉・とみくら	……	プロデューサー
洋子・ようこ	……	富倉の愛人
カメラマン		
カメラマン助手		
劇場のおやし		
女子高生達		
芸能週刊誌の記者達		
リポーター		

第一幕

幕前

(中央奥の出はけ口より、舞台中央の面に走り出る龍治と修)

龍治・修　はいこんにちは。

修　修です。

龍治　龍治です。

龍治・修　二人合わせて、

龍治　吉本正弘です。

修　ちよと待て。

龍治　ハイ？

修　ハイじゃないよ、二人合わせてメガトンボウイズでしょうが。

龍治　ハイ？

修　何で俺の知らないうちにコンビ名が変わるかな。

龍治　小さい事にこだわるなよ。

修

いや、大事なところでしょ。

龍治

分かったよ、ちゃんと知らせておくべきだった。

修

知らせりゃいって話でもないし。

龍治

そう。

修

それに今二人合わせて何て言ったの。

龍治

吉本正弘でくす。

修

その人誰。

龍治

小学校の時の同級生だよ。

修

今それ関係ないよね、

龍治

はい？

修

いやだから君の小学校の友達は全然関係ないよね。

龍治

ちよっと待て、

修 何だよ、

龍治 なんで関係ないって言えるんだ。

修 関係ないでしょ。

龍治 吉本は俺の親友だった奴だ、大事な関係じゃないか。

修 そうじゃなくて、修と龍治のコンビ名が何で吉本正弘なんだって話だよね。

龍治 ダメかな。

修 ダメでしょう。

龍治 めちゃくちゃいい友達だったんだけど。

修 それも関係ないから。

龍治 いや実はこの間その吉本君から連絡がありました、それでつい。

修 あ、何だそういう事。

龍治 すごい仲の良い友達で、

修 なるほど、それを早く言つてよ、相方の親友って事はそりゃあ俺にとつても大事

な人だ。

龍治

じゃあコンビ名を、

修

変えません。小学校の同級生か、懐かしいよね、十何年ぶりとか二十何年ぶりとかって話だよね。

龍治

いや二日、三日ぶりかな。

修

けっこうずっと続いてんだ。

龍治

二十五年間同じ団地で、

修

もう家族も同様だね。

龍治

でも本当にいい奴で、

修

あ、懐かしいエピソードとかある訳ね。

龍治

あれは小学校四年生の春だった。給食費が払えなくて、俺はその事を先生に言わなくちゃって、職員室に…。

修

そうか、君も子供の頃は苦労したんだね。

龍治

でも恥ずかしくて、恥ずかしくて、職員室に行くのが嫌で、そしたら吉本は俺だ

けにそんな思いはさせられないって、

修 うわくもしかして、もしかして、

龍治 あいつは、あいつは本当はちゃんと給食費持ってたのに、

修 自分も払えませんでした一緒に職員室に行った訳だ、くく泣かせる話だ。

龍治 めちゃめちゃいい奴で、

修 ホントいい奴だ。貧乏な君んち、彼の家はお金持ち、だけど子供の世界にそんな事は関係ない、二人の友情は、

龍治 ちょっと待て、

修 何、

龍治 失礼だろ、

修 何が、

龍治 何で俺んちを貧乏とかって決め付けるの。

修 いや、給食費が払えなかったんだよね。

龍治 そうだよ、給食費全部ゲーセンで使っちゃって。

修 あくじゃあ吉本君も、

龍治 次の日同じゲーセンで楽しかったな。

修 ただの悪ガキだ。

龍治 まあまあ、一緒に悪戯もやった大事な幼馴染という事なんだけどね。

修 まあ、確かに男の子は少しくらいやんちゃな方が元気があつていいよね。

龍治 あ、君も覚えがある。

修 まあ人並みに。

龍治 みんなが一度は通る道だからね。

修 そう、今だから言えるけど恥ずかしながら中学の時は僕も荒れてました。

龍治 どんな事やったの。

修 学校のトイレに隠れてタバコ吸ったりね。

龍治 吸った吸った、イラン人から買って、一度きりのつもりがやめられなくなったり

ね。

修

微妙に違うな。

龍治

その他には、

修

必要も無い消しゴム万引きして、店の親父に見つかってこつぴどく怒られたり。

龍治

そうそう、必要も無いのに交番に忍び込んでピストル盗んで全国に指名手配されたりね。

修

こらく、レベルが違うだろ、レベルが。

龍治

そう褒めるなよ。

修

褒めてないから。

龍治

まあまあ、誰もが通る道ですかねら。

修

通らないでしょ。

龍治

まあ、一緒にそんなやんちゃしてた吉本君から先日連絡が来まして、

修

早く手を切った方がいいと思うけどね。

龍治 その吉本君が、連絡してきたのは、

修 連絡してきたのは、

龍治 その吉本君が連絡してきたのは、

富倉 (客席で突然立ち上がり) はいそこまで。(舞台上がり) もう結構ですよ。

修 あの、富倉先生、

龍治 ここからが面白いんですけど。

富倉 もういいよ。

修 あの…ダメですか。

富倉 うくん、プロデューサー、脚本家、放送作家としての僕のプレシヤスなタイムをね、こんなくだらない事に使ってしまうなんて、トータル、アブソルトリ、コンプリートリー、つまりまったくもって、ウエイストオブタイム、時間のむただよ。

龍治 うけないでしょうか。

富倉 うけないかだって、笑わしてくれるね。

龍治 笑っていただけましたか。

富倉 笑えるわけじゃないでしょう、こんなのはコントでもなんでもないよ。見てみなさい、客が引いちやつてるじゃないの。

龍治 あの、富倉先生ここには、

修 客はいないんですけど、

富倉 ホープレス。見込みのかけらもないね。そんなことだから君らのネタは独りよがりなんだよ。いいかい、練習するときだって観客の息遣い視線の動きノリを想定しながらやるんだよ。そうすればピツタシ決まったときには、いないはずの観客の大爆笑が聞こえてくるんだよ。

修 なるほど、

龍治 そんなもんすかね。

富倉 とにかく僕は忙しいんだよ。事務所からの頼みだったから付き合っただけだよ、こんなくだらん事に時間を取っちゃいけないの、スケジュール一杯なんだから。

洋子 (下手、面より登場) 先生、まだなの、

富倉 洋子ちゃん、もう終わったからね、行こうね。

洋子 早くして、(富倉、洋子と腕を組み、下手へ帰りかける)

龍治 富倉先生、ちよつと待ってください。もつと具体的に言つて下さいよ、どこをどう直せばいいとか。

富倉 どこ、全部ですよ全部、特にパンチラインかな、オチが全部空回り。

洋子 あの、あたし良く分かんないけど、

富倉 何、何洋子ちゃん、

洋子 言つていいの。

富倉 言つたんさい、言つたんさい。

洋子 この人たち顔怖しい。だから笑えない。

富倉 鋭い、鋭いなく洋子ちゃん、それはね悲壮感って奴ね、悲壮感、まあいくら売れないからって、悲壮感漂ってたら誰も笑つちゃくれないうね。

洋子 早く行こう、先生。(富倉の腕を取つて引つ張る)

富倉 はいはい、行こうねく洋子ちゃん、(洋子と腕を組んで下手に退場しながら振り返り)君たち、はつきり言つてホープレス、つまり日本語で言うところの、見込

みなし、ハハハハハハハちよつときつかったかな、ウン（退場）

龍治

（富倉達がいなくなるのを見届けて）馬鹿野郎、何言つてやがんだいこの色ボケの横文字かぶれ、お前のその腐った鱗の目玉で、俺達の高度なギャグが理解できるかっつんだ。つたく、何にも分かつちやいねえよ。なあ修、（振り返ってみると、修は深刻な顔をして立っている）…どうしたんだよ。

修

兄貴、俺達、やつば無理だよ。

龍治

何心配してんだよ、あいつだけがプロデューサーじゃないって。

修

俺達…いや、兄貴はともかく…俺には才能ないよ。

龍治

こいつ、あんなのにちよつと言われたくらいで弱気になつてるな。だからなあいつに見る目がないんだよ。

修

富倉は嫌な奴だけど、言つてたことは当たつてたよ。

龍治

オチがつまんない、独りよがりだつてか、

修

…（うなづく）

龍治

あいつはね、有望な若い芸人の芽をつんじまうんで有名なんだよ。あんなへボプロデューサーに俺たちの才能や感性がわかつたら、馬がモーと鳴いてカラスがコケッココー、相撲取りがハイレグ履いてシンクロで金メダルだよ。

修
兄貴：つまんないよ。

龍治
…心配するなつて、またすぐにチャンスは巡ってくるんだから。

修
無理だよ、今日のだつて兄貴が事務所の西野さんに、麻雀の借金を帳消しにするからつて無理矢理アポを取らしたんじゃないか、社長にばれたら事務所だつて追い出されるよ。

龍治
馬鹿野郎、あんな事務所こつちから出てやるよ。俺達にまわしてくる仕事ときたらストリップ小屋の前座かデパートの屋上でぬいぐるみに入ってガキの相手じゃないか。

修
とにかく俺、才能ないつて分かつたんだよ。

龍治
俺がカバーしてやるよ。

修
(首を振る)無理だつて。

龍治
…じゃあ、どうするんだよ。

修
俺、田舎に帰るよ。

龍治
修、お前、

修 兄貴、すまない。

龍治 冗談だろ。

修 ……（俯いたまま）

龍治 俺達の夢はどうなるんだよ、何のために今まで苦労してきたんだよ。お前、今更サラリーマンとかになれるつもりかよ。男だったらさ、人生勝負しなきゃあ。新しいネタ考えてもう一回チャレンジしようぜ。

修 ……（首を横に振る）

龍治 あのな、誰にだつてあるんだよ、そういう迷いは。先のこと不安になつてさ、安定した生活を求めたくなる時期がな。だけどその時が一番大事なんだよ。ビッグになつた奴等はみんなそういう迷いを乗り越えて成功してるんだ。

修 兄貴…先週、おふくろから手紙が来たんだ、親父が入院したつて。

龍治 え、

修 親父酒が好きだから、飲み過ぎて肝臓やられたみたいで。

龍治 ……何で黙ってたんだ。

修 ただの飲み過ぎだから、すぐにどうこうつて大袈裟なことじゃないけど、俺一人

龍治

っ子だし、やつぱ親のことは気になるし、帰っても何もできないことは分かっているけど、田舎に帰って定職に着いたら、親父やおふくろは安心してくれるし。

…：そっか。

修

…：兄貴、すまない。

龍治

馬鹿野郎、何もすまないことはありやしないよ…：分かったよ。そういうことだったら仕方ないよな。

修

でも兄貴、俺この三年が今までで一番楽しかったよ。ずっと忘れないよ、兄貴のこと。

龍治

馬鹿、俺は三日で忘れるよお前なんか。

修

ありがとう、兄貴。

龍治

もう分かったから、お前先に帰って飯の準備してな、俺は西野の奴から麻雀のツケ取り立てて来るから、あんなボケ老人みたいなプロデューサー紹介しやがって倍返しじゃないとあわねえな。酒買って帰るから今夜はパーッとやろうぜパーッと。

修

…：兄貴。

龍治

早く行けよ。

修、うなずいて下手奥に退場。龍治、修がいなくなったのを見とどけて、上手に向かって少し歩き、立ち止まる。

龍治

いよいよピン芸人ってか…(下手奥より真理登場、手にバスケットを持っている。気づかれないように龍治を見守る。)独り用に書き換えるか…え、小学校からの親友に吉本正弘君というのがいまして、そいつがめっちゃくちゃいい奴で…ここらが潮時かな…修の言うとおりに、才能がないか。

真理

そんなことありません。(龍治、驚いて振り返る)そんなこと、絶対にありません。轟龍治は、必ずスターになる男です。

龍治

誰だい、あんた、

真理

すみません、勝手に入っちゃって、私、橘真理です。良かったら真理と呼んで下さい。

龍治

はあ、

真理

私、龍治さんの大、大、大、大、大ファンなんです。

龍治

からかってんのか。

真理

違います、本当にファンなんです。

龍治　ふざけるなよ、ここで何してるんだ。

真理　（バスケットから包みを取り出し）あの、これクッキーです。おいしくないかも
知れませんが、ぜひ龍治さんに食べていただきたくて私が焼きました。

龍治　クッキー、

真理　アパートの方、西荻のすずらん荘208号室にお届けしようかなって思ったんで
すけど、そんなことしたらまるで調べたみたいで気を悪くされるかなって思って、
調べてんじやないか。

真理　ごめんなさい。

龍治　そんなものいららないよ。

真理　え、

龍治　近頃怪しい女がアパートの回りをうろついでるって大家が言ってたけど、あんた
じゃないのか、

真理　そ、そんな、そんな、

龍治　言いすぎたよ、悪かった…もらつとくよ（クッキーを受け取る）

真理

入り口の鉢植え枯れそうになってたので水あげときました。

龍治

あんただよ。

真理

すみません。

龍治

誰かと勘違いしてんじゃないの、自慢じゃないけど俺はファンができるようなメジャーな仕事はした事ないよ。

真理

ですよね。

龍治

大きなお世話だよ。

真理

でも龍治さんで、どんな仕事の時も一生懸命やってて、光ってるじゃないですか。

龍治

俺のどんな仕事を見たって言うんだよ。

真理

先週月曜日は、南部デパート越谷店で怪獣ショーでしたよね。

龍治

え、

真理

片思いのゴジラの切ない腰の動きが絶品でした。

龍治

はあ、

真理

火曜日は亀戸のロクマルストアーで開店売り出しの呼び込み。チラシで紙飛行機を作って子供たちと飛ばしたのは結構うけたんですけど、店長さんには怒られましたよね。水曜日はTBSテレビの金曜サスペンスで死体の役。龍治さんシーン変わりの瞬間にうす眼でウインクしてたでしょ。

龍治

何で知ってたよ。

真理

ディレクターからは背中しか見えないけど、ADがチェックしてるサブのモニターにはばっちりでしたよ。

龍治

え、そうか、まずいな。

真理

どんな時も存在感をアピールしてるのがスゴイですよ。

龍治

いやそういう問題じゃ、

真理

木金はオフで終日パチンコ、日本の芸能界はまだまだ器が小さくて龍治さんの才能を生かしきれないんです。土日は所沢商店街の五十周年記念イベントの司会、軽妙なギャグの連発に、買物の主婦達も、水を打ったように静かになっていました。

龍治

…あんた何者だい。

真理

だから、轟龍治の熱烈なファンです。

龍治　もし、俺をからかっているんじゃないとしたら、いわゆるオタク、芸人オタク、くっそくマイナーな奴に詳しくければ詳しいほど自慢なんだ。

真理　そんなんじゃないありません。私にはわかるんです。龍治さんは、誕生日の星です。今は暗闇に漂っていても、いつか必ず、星の中でも一番明るい一等星になる人なんです。

龍治　…本気でそう思ってるのかい。

真理　もちろんです。

龍治　だったらとんだ買い被りだよ…俺なんかしよせん三流芸人さ、相方にまで愛想つかされるようなね、

真理　修さんは、龍治さんに愛想をつかしたんじゃないかって、ご両親のために故郷に帰るんじゃないですか。

龍治　…何でも知っているんだな…すまないけど、あんたと話してる気分じゃないんだ、帰ってくれないか。(クツキーを) これ、もらっとくよ。

真理　…ごめんなさい…(下手に向かおうとするが、振り返り)…あの…どうしても、お笑いじゃなきゃいけませんか。

龍治　どういう意味だよ。

真理

私、龍治さんにはシリアスな方があってるって気がするんです。無理にコミカルな顔を作ったりしないで、真剣な眼差しに、なんていうかこう、人を引きつける魅力っていうか、説得力っていうか、

龍治

(怒鳴る) 素人に何がわかるんだよ、出て行ってくれよ。

真理

…ごめんなさい、生意気言って…帰ります。(下手に向かい少し歩いて立ち止まる)でも私、見たたんです。龍治さんの深く澄んだ目を、龍治さんに見つめられたほんの数秒の短い時間…でも私が龍治さんのファンになるにはそれで充分でした。

龍治

あんた、誰なんだ。

真理

…轟龍治の大、大、大、大、大ファンです、さようなら。(下手奥に走り去る)

(真理の行方を見つめる龍治、上手奥に移動)

第二幕

(舞台下手より西野登場)

西野

今後は仕出しは一切やらないなんて、そんなこと言ったら俺が社長に怒られちゃいますよ。それに、先輩にこんなこと言って何ですけど、今龍治さんの仕事の

七割がエキストラじゃないですか、それ全部断わったら毎日雀荘に行くしか無いですよ。もつともそのほうが稼ぎはいいかも知れませんがね。とにかく、修がいなくなっただけからこの二ヶ月、龍治さんともに働いてないんですからね、コメントやるんだったら相方だつて必要だし。あつ、そうだ、忘れてた（ポケットから封筒を取り出し）コメディアン志望なんて履歴書が来てたんですよ。それがね、笑っちゃうんですよ、ほら、名前が佐藤修、やめたつたのが鈴木修で、後釜が佐藤修なんて、話がうますぎるぞつて、社長はもうすっかり龍治さんの相方にするつもりですよ。（下手に退場）

振り返る上手奥の龍治。

龍治

修、昨日な、社長のサギ山が腰巾着の西野よこして、おまえの後釜だつて、ちんけな男の履歴書おいてつたよ。俺は当分一人でやってみるつもりさ。いろいろ考えることもあつてな。変なことわりでお笑いだけやってきたけど、自分の可能性に枠をはめて、身動きできなくなつた様な気がするんだ。しばらく仕事から離れて、自分に本当に向いてるのは何かつて考えてみるよ。俺もいい加減若くもないし、少し現実的にならなきゃな。就職決まつて良かったな、すっかり堅気だな。七三分けのネクタイ姿の写メには笑っちゃまったけど、親父さん、おふくろさんを大事にしろよ。

（中央の出はけ口より手鏡を持って真理登場、椅子に座る。少し遅れて真理の後から友達
の初江、ハサミを持って登場）

初江
あのね真理、今は平成二十三年なの、だけどあんたのその考え方は明らかに昭和だね。

真理

いいでしょ、これが私、頭古いのは自分でも分かっているの。とにかく早くやってよ。

初江

あのさ、これってあんたが親父さんの劇場を継いだ時と同じだと思わない。

真理

どういう意味。

初江

あんたいつだって他人の夢に振り回されてるんだよ。

真理

そんなつもりないけど。

初江

つもりはなくても結果はいつもそう。

真理

父さんが生きてる間は小屋を潰す訳にはいかなかった、ただそれだけ。

初江

親父さん元氣だった頃にはあんなに嫌がってた商売なのね。

真理

そうよ、だから父さんがいなくなつた今、劇場は人任せにして私は自分のやりたい事をするの、勝手なもんでしょ。とにかく早くばっさりやってよ。

初江

よしなよ真理、本気で短くしたら、またこれだけ伸ばすのにどれ位かかると思ってるの、あんた後悔するよ。

真理

もう決めたの、いいからやって。

初江
そいつは真理の事なんて何とも思っちゃいないんだろ、せつかくのきれいな髪を無駄に切ることないって。

真理
初江、愛するって事は見返りなんか期待しないことなのよ。龍治さんがあたしのことを愛してくれなくても、あたしの龍治さんへの愛は変わらないの。

初江
やっぱり古いわ。しかも安っぽいメロドラマ、それって昭和も初期のセリフだよ。いいから、早く切って、

真理
小学校からの付き合いだけど、ショートのがあんた見た事ないよ。長い方が好きだっていつも言ってたじゃん。

初江
私だって本当は切りたくないよ。ダイエットして頬骨を出して眉を太く描いたらこの髪のままでもロン毛の男で行けるかなって思ったけど、私の場合は髪が長いと女にしか見えないのよ。

真理
なんで男になんなきやいけないのよ。

初江
龍治さんへの愛が、私を男に変えるのよ。

真理
やっぱり言ってる事が支離滅裂。

初江
いいからばっさりやって。

初江

どうなっても知らないからね。(覚悟して目を閉じる真理) いくわよ(ハサミを振り上げ叫ぶ) アゝ、

真理

(つられて一緒に叫ぶ) アゝ、

初江

やっぱり出来ないわよ、(真理の髪を後ろで束ね、上に上げて自分が被っていた帽子をを被せて隠す) これでいい、ね。

真理

(鏡を覗きこみ、内心ほっとして) これで…いいか。ねえ、修って呼んでみて。

初江

え？

真理

いいから、修って呼んでみてよ。

初江

修、

真理

(ポーズを決め) 兄貴、おいらが兄貴を、スーパースターにしてみせますよ。

(真理、下手より走って退場。初江、中央奥の出はけ口より退場)

第三幕 龍治の所属する事務所、崎山プロダクション。

舞台上手より、電話しながら社長の崎山登場。後に続いて米倉と西野登場、崎山の電話に聞き耳を

立てている。

崎山

はい、はい、えーっ、もうこちらに向かつてらっしやる、いえいえ、とんでもございません迷惑だなんて、もう大歓迎でございます。ご無礼のないようにこの崎山プロダクション全力をあげてお迎え致しますのでご安心ください。そうしますとなんでもございませぬ。うちの米倉をその大役にとお考え頂いているということでございますね。は、いえいえ、それはもう、承知しておりますでございます。はい、はい、わかりました。ひとつ宜しくお願いいたします。はい、はい、はい。

(感極まったように電話を終え、受話器を西野に渡す) 米倉くん、チャンスがついにやってきたわよ。八月からの連ドラのレギュラー、しかも、しかも今をときめく南条小百合の相手役よ。

米倉

社長、

西野

本当ですか、米倉さん、

米倉

ついに俺にもチャンスが巡って来たんですね。

崎山

そうよ。この崎山プロダクションが、メジャーになる日がやってきたのよ。

米倉

そしてこの俺がスターに、

西野

(米倉と手を取り合う) おめでとうございます。

米倉
ありがとう、西野。

崎山
待ちなさい、まだ先があるのよ。いい、君達も知っているとおり南条小百合は完璧主義者で気難しくて、おまけにわがままなの。今回の相手役の件も今の段階では先方のプロデューサーが、写真選考だけで気に入ってくれているのよ。南条小百合は自分の目で確かめないと納得しない。

米倉、西野
それで、

崎山
それで米倉君、南条小百合は君に合うために、今こちらに向かっているのよ。

米倉、西野
えっつ、

西野
大変だ、

米倉
社、社長、任せてください。南条小百合だろうが誰だろうが、俺の男の色気でまいらせてみせますよ。

崎山
心強いわ、米倉君。君はこの崎山プロダクションの希望の星よ。

西野
頑張ってください、米倉さん。

米倉
大船に乗った気で、まかしてくれよってんだ。(ドアホーンの声、ピンポーン)

崎山
南条、

三人 小百合だ、ア、(三人、うろたえて走り回る。もう一度ドアホーン鳴る)

崎山 ハイ、ツ、西野、ここきれいにかたづけなさい、まったく何よこの汚い部屋は、だからいつも言ってるでしょ、奇麗にしておきなさいって。

西野 申し訳ありません。社長(西野と米倉、慌てて辺りをかたづけようとする)

崎山 米倉君、君はいいのよスターなんだから。

米倉 (うろたえて) 社長、お、俺、どうしよう。

崎山 なに言ってるんの、さっきの元気はどうしたの。

米倉 だって、社長、

崎山 だから、君はどっしりと構えてればいいんだから。

米倉 こうですか、(米倉、偉そうなポーズ)

崎山 ああ、でも新人らしい謙虚さも、きらきらさせちやったりした方がいいかな。

米倉 ええっ、きらきらって、(ポーズ、目をパチパチ)きらきら、きらきら、

真理 (声だけ) 失礼します。

三人

(直立不動、ひきつった声で) ハーイツ、どどどど、どぞぞつ、
(舞台下手より、帽子を被り男装した真理登場)

真理

失礼します。(拍子抜けした三人の顔を怪訝そうに見ながら) あのく、

崎山

貴方、何。

真理

履歴書をお送りしました佐藤修です。

崎山

佐藤、

西野

ああ、何だ社長、例のコメディアン志望って奴ですよ。

崎山

ああ、龍治君の相方になって言ってた、

米倉

何だよこんな時に、びっくりさせるなよ。

西野

女みたいな声出すから、てつきり、

真理

(咳払い、男声を作って) あの、面接は今日だって言われたんですけど。

西野

ああ、あれねえ、連絡遅れて申し訳なかったけど、うちじゃ取れなくなつたから、
帰ってくる、今取り込んでるし。

真理

ええ、そんな、

米倉

今忙しいんだよ。帰れ帰れ、シツシツ、

真理

言われたとおりに来たのに面接もしていただけないなんて、ひどいじゃないですか。

西野

しつこい奴だな、帰れつたら帰れよ。

崎山

ちよつと待って、

西野

社長、龍治さん相方はいらないうって、

崎山

分かっているわよ（西野に耳打ち、米倉も一緒に聞く）掃除をさせて帰しても遅くないでしょ。

西野

さすが社長。

崎山

あなたね、芸人になる道は厳しわいよ。なれるかどうかは貴方次第だけど。とりあえず貴方のやる気を見せてもらいましょか。今すぐこの部屋の掃除をしてくれる。迅速に、かつ出来るだけきれいにして頂戴。これがうちの面接のやり方。

真理

はい、わかりました。

西野

モップやバケツはそこ出て突き当たり、階段下の物置きの中だから。

真理

はい、わかりました。(真理、走つて下手に退場。顔を見合わせほくそ笑む三人)

米倉

社長、それにしても龍治の奴、わがままが過ぎますよ。

西野

仕出しはやらない、相手はいらない、(真理、下手袖の辺りに登場)

真理

あのホウキは、(真理に気づかない三人)

西野

龍治さんは社長のお言葉を何だと思つてんですかね。

(真理、上手の袖で三人の会話を傾ける)

崎山

もうそんな事はどうでもいいの。やつとうちにも運が向いてきたのよ。この際龍治君みたいな歩調を乱す人には出て行って貰います。米倉君が今度の南条小百合の相手役に決まれば、もううちも弱小プロダクションなんて呼ばれなくなる。名前が売れば才能のある人間が集まってくる。そうなたらカスは切り捨。そのためには何としても米倉君、君が頼りなんだから。

米倉

ま、任せてください、社長。

崎山

しっかりしてよ。

西野

社長、もう急がないと、

崎山

あそうだ、こんな話している場合じゃ無かったわね。米倉君は着替えた方がいいわね。スーツあったかしら、スーツがいいわ。南条小百合が来る前に早く着替えて。

米倉

わかりました、急いで着替えます（米倉、上手に向かおうとする。真理、隠れる）

西野

あ、米倉さん、

米倉

ん、

西野

（にやけた笑いで）派手な奴がいいんじゃないすかね。

米倉

（にたりと笑って）オッケー、（上手に退場）

崎山

そうだ西野君、貴方角のケーキ屋でババロアでも買って来て。

西野

あ、それはいいですね。雑誌の対談で言っていましたよ。南条小百合、甘いものが好きだって。

崎山

万全の準備をして迎え撃とうじゃないの。

西野

戦争みたいですわね。

崎山　うちが世に出るか出ないかの、天下分け目の関ヶ原の戦いよ。

西野　社長、お上手。じゃ他に何か準備しておく事はありましたっけ。

崎山　そうですね、あ、轟君は近づけないほうがいいわね。あの子何かと面倒を起こす子だから。

西野　そうですね、それを忘れちゃいけません。龍治さんいつだって、

龍治　（下手より登場）俺がどうかしたか、西野。

西野　あ、いえいえ、龍治さん今日は遅いなって、言っただけです。はい。

龍治　社長、お客さんですよ。その先で道を訊かれたんで、お連れしました。

（下手より南条小百合登場）

崎山、西野　南条、先生、

南条小百合　（龍治に）ありがとうございます。もしかしてあなたが米倉さん。

龍治　あ、いえ、俺は

崎山　（龍治を押しつけ）ああ、とんでもございません。米倉は、こんなチャンピラではございません。

龍治

チンピラ、

南条小百合

どうでもいいけど汚い事務所ね。

崎山

あの、普段はもう少し奇麗なんですけど、今日は特別散らかってて、いやお恥ずかしい。もし先生がおいでになると分かかっておりましたら社員一同で大掃除しておりますのに、ねえ西野君。

西野

もちろんですとも。先生がおいでになると分かかっておりましたら、大掃除も小掃除も致しまして金ぴかのぴかぴかに磨き上げて、廊下には赤いじゅうたんなんか敷いたりしまして、いや、もういっそビルごと新築してあります。なんて、ハハハハハハハハハハ。

崎山

ハハハハハハハハ（南条小百合の冷やかな視線に気づき）ばか、くだらない事を言つてないで米倉君を呼んで来なさい。

西野

社長、あのババロアは、

崎山

もう、遅いわよ。

西野

はい、（上手に退場）

南条小百合

おたくが社長のサギ山さん。

崎山

はい、あの、崎山でございます。

南条小百合

そつ、話は聞いてるでしょう。

崎山

はい、米倉でしたらたつた今まいりますので。いや、この米倉という男はでございますね、私の口から申し上げるのもなんですが、我が崎山プロダクション期待の大型新人でして、(真理、モップを持ちハタキをかけながら後ろ向きで上手より登場、下手の龍治に気づき、崎山と小百合の後ろを廻り龍治に近づく)ま、役者としての感性が豊かと言うか天性の素質に恵まれたというか、各方面から注目を集めておりまして、

南条小百合

プロフィールは結構です。私は自分の目で見たものしか信じないの。

崎山

は、はい、それはもう仰る通りです。ただこの米倉は以前から南条先生の事を大変尊敬しております、

真理

(龍治に)あの、今日からこちらでお世話になることになりました佐藤修です。

龍治

修、

崎山

今回の先生との共演の話をしましたら、本人いわく、全てのスケジュールをキャンセルしても是非、是非、あ是非、お受けしたいと申しております、

龍治

ああ、お前履歴書送ってきた奴か。

崎山 何と申しまでも南条先生と言えはその美しさは若き日のエリザベステアラーはたまたビビアンリー、加えてマリリンモンローに勝るとも劣らない妖艶さを兼ね備えた現代日本芸能界の女王でいらっしやる訳でして、

南条小百合 お世辞はいいから少し黙って下さらない。私、サギ山さんのおしゃべり聞きに来た訳じゃないから。

崎山 こ、こ、こ、こ、これは失礼いたしました。

龍治 社長、こいつを俺の相手につて話だったらお断りだぜ。

崎山 今そんなことはどうでもいいの。

真理 ええ、どうでも良くはありません。私是非、いや俺どうしても、

南条小百合 本当に落ち着かない事務所ね、私頭痛がしてきたわ。もう帰ろうかしら。

崎山 あいやいやいやいやいやいや、すぐに米倉がまいりますのでしばらく、今しばらくお待ちください。(上手に向かって叫ぶ) 米倉くん。

(上手から西野登場、手にしたラジカセのスイッチを入れると派手な音楽が流れ、真赤なスーツに大きな水玉の蝶ネクタイをした米倉登場。音楽に合わせて踊る)

米倉 (米倉くるりと廻ってポーズ、西野ラジカセを切る) お待たせしました。

崎山

よ、米倉、くん

南条小百合

何の余興かしら。

崎山

ハハハハ、少し、派手すぎましたね。

西野

(小声で、) もしかして、はずしちゃいました。

米倉

(泣きそうな顔で) 社長、

崎山

馬鹿、

南条小百合

(ため息) 話さなくても彼の感性は充分わかったような気もするけど、せっかく来たんだからチャンスはあげましょう。

崎山

ありがとうございます。

米倉、西野

ありがとうございます。

南条小百合

とりあえずこれを読んでもらいましょか。(台本を崎山に渡す)

崎山

これは、

南条小百合

今度のドラマ『愛の濁流』の台本よ。夫を殺した犯人を愛して、一緒に逃亡する女の話。これくらいは初見である程度こなせなきゃ、私の相手は務まらないわよ。

崎山 はい、分かりました。米倉君、(米倉に台本を渡す)

米倉 は、はい。

南条小百合 用意はいいわね、シーン二十一、頭からいくわよ。……『私のために、殺したの

ね』

米倉 (台本を見ながら、たどたどしく) ああ、えっと、『いや、俺自身のためさ。君を不幸にする男が許せかったんだ』……ああ、ちよつと緊張しちゃって、すみません。もう一回いきます。『いや、俺自身のためさ。君を』

南条小百合 もう結構よ。サギ山さん、話はなかつたことにします。

崎山 先生、

米倉 あの、先生、まだ一言言っただけなんですけど

南条小百合 充分分かつたわ。

崎山 南条先生、

米倉 もう一度、もう一度だけやらせてください。

南条小百合 素人と仕事は出来ないの。

米倉

社長、

崎山

メジャープロダクションの夢が……。

南条小百合

じゃましたわね。

真理

（小百合が下手袖に消える直前に大声で）大女優が聞いて呆れるよ。（小百合振り返る）あんたの眼は節穴かい。

南条小百合

何を言ってるの。

真理

視野が狭いって言うかさ、ガキの使いじゃあるまいし、これを見てこいって言われたらそれだけ見ておしまいかよ。

南条小百合

何なの、この失礼なチビは。

崎山

こ、こ、こ、こら、君は南条先生に何てことを、

真理

だって社長そうじゃないですか。もつと光っている才能がそこにあるのに、気づかないで帰ろうとしてるんだから。

南条小百合

あなた頭でもおかしいの。

崎山

君何を言ってるの。南条先生、この子はうちとは何の関係もない子なんです。

真理

へえ、社長そんなふう言うんだ。いいよ、だったら辞めてやるよこんな事務所。長い間お世話になりました。

崎山

はあ、

真理

だけど、辞める前に一つだけお願いさせてください。南条先生、もう一つの才能にチャンスを与えてくれませんか。大女優の先生にとつて俺達は虫けら同然かもしれないけど、先生にだって駆け出しの頃があったなら分かるはずだ、ここにいる虫けらの命は、いつかスターになる夢です。だけど俺はその夢、自分の命をかけて先生にお願いします（龍治を指差し）もう一つの才能に、チャンスを与えてください。

龍治

お前、何を言っているんだ。

真理

きつと先生にも分かっていただけです。もし試してみて駄目だったらこんなに失礼なことを言ってしまったんだ、俺はこのプロダクションを辞めます。いや、一生こんな世界とは縁を切ります。

南条小百合

おかしな子ね、そこまで言うんだったら、どうして自分を売り込まないの。

真理

そうしたいけど、その台本は俺には向いてません。

南条小百合

…分かったわ、（龍治に）あなた、名前は。

龍治

轟、龍治です。

南条小百合

サギ山さん、いいわね。

崎山

(狐につままれた感じで) え、ええ、それはもう…私は最初から彼の方をお勧め
しなかったんですよ。

米倉

社長、俺は、

崎山

引っ込んで(米倉の台本を取って龍治に渡す) 龍治君、頼むわよ、崎山プロダ
クションの命運がかかっているんだから。

龍治

…分かりました。

南条小百合

同じくシーン二十一、頭からいくわよ。

龍治

ちよっと待ってください。(台本をしばらく見る)

南条小百合

初見なんだから、見ながらやっていいのよ。

龍治

(台本を真理に渡す) お願いします。

南条小百合

いいのね、『…私のために、殺したのね』

龍治

『いや、俺自身のためさ。君を不幸にする男が許せなかったんだ』

南条小百合

『血を、拭かなくちゃ、』

龍治

『…このままでいい、この赤い血は、君を愛したことの証さ』

南条小百合

『でも』

龍治

『捕まっても構わない。殺意はあったのかって訊かれたら、はいありましたって言うよ。動機はって訊かれたら』

真理

(小声で龍治に) 龍治さん、眼を見つめて、

龍治

(小百合の眼を見て) 『俺はにっこり笑って答えるよ、生まれて初めて愛した女が、その男のものだったからって』

南条小百合

(龍治の胸に飛び込む) 『逃げて、私を連れて逃げてちょうだい』(一同、圧倒され、しばしの沈黙。小百合、龍治から離れて) 明日十二時、うちの事務所に来て、サギ山さん、詳しい打ち合わせはプロデューサーから電話させるわ。

崎山

は、はい。

南条小百合

(真理に) あなたの言う通りね、ありがとう。もう少しで素晴らしい才能を見逃すところだったわ。あなたも役者を目指しているの。

真理

すみません。あんなこと言って、実は俺、龍治さんの付き人なんです。

龍治
え、付き人って、

南条小百合
そういうこと、それであんなに一生懸命だったのね。でも気に入ったわ。サギ山さん、この子辞めさせたら、私が承知しないわよ。

崎山
は、はい、もちろんですとも。

真理
ありがとうございます。

南条小百合
轟龍治さんね、期待しているわ。(下手面の出はけ口から退場)

崎山
ああ、お待ちください先生、(西野、米倉に)何ぼさつとしんの、先生をお見送りして。

西野、米倉
は、はい、

西野、米倉、崎山に続いて南条を追って退場。真理も走って後を追うが、出はけ口の前で立ち止まり、振り返り龍治を見る。一瞬見つめあう二人、真理崎山達の後を追う。後に残った龍治、上手に移動。

第四幕

(中央のはけ口から大きなバッグを肩に下げ真理登場。上手の龍治に接近)

龍治 お前ベタベタくつつくなよ。

真理 付き人ですから。

龍治 頼んだ覚えはないぞ。

真理 しょうがないつすよ、社長命令ですから。

龍治 勝手にしろ。お前、なにへらへらしてんだよ。

真理 だって俺、龍治さんと一緒だと楽しいんですよ。

龍治 お前ねえ、

真理 お前お前って、ちゃんと修って呼んでくださいよ。

龍治 修？

真理 ハイ、

龍治 修、ねえ。

真理 ハイ、

龍治 (小声) 修、

真理 (竜治の耳元で叫ぶ)ハイ、

龍治 お前ねえ、

真理 (にっこり)お前じゃなくって、修、修ですよ。

竜治 (苦笑)

真理 兄貴、いよいよ収録ですからね、頑張りましょうね。

龍治 わかってるさ。じゃあ出かけるか。衣装や小物はオッケーだな。

真理 ダブルチェックしました。カバン持ち修、準備完了です。

龍治 ようし気合い入れて、いくぞ修。

真理 兄貴、ついてくぜ。

西野 (下手奥より走り出る)社長、『愛の濁流』すごい反響ですよ。視聴率だって初

回こそ二十パーセント止まりだったけど、回を追うごとにロケットみたいに急上昇、今じゃ五十パーセントに迫る勢いです。芸能マスコミみんな言ってますよ、とんでもない新人が現われたって、轟龍治は和製ジェームスデインだって。

上手に走り去る西野。中央の出はけ口に米倉登場。手紙の束を手に持ち、一枚一枚宛名を読み上げ、

床にバラ巻いている。

米倉

轟龍治様、龍治様、轟様、轟龍治様、これも、これも、畜生、なんでこうなるんだよ。本当だったらこのファンレター、みんな俺のだったのに。(中央より退場)

崎山

(舞台下手奥より登場、上手に移動しながら) うーん、代官山、自由ヶ丘、そんな田舎じや話にならないわね。もつと目立つ所は無いの、新宿とか渋谷とか。あゝでももつとセンターがいいわね。銀座、赤坂、六本木辺りかしら。もちろん駅からは傘の要らない距離よ。え、予算、何言ってるの天下の崎山プロダクションの新しい事務所よ。お金に糸目はつけないって初めから言ってるじゃないの。とにかく都心の真中、ど真ん中にしてちょうだい。売ってくれるんだったら皇居だつて買いたいくらいの勢いなよ。(上手に退場)

45

(中央よりスーツを着た龍治登場、後を追って、カバンとネクタイを手に真理登場)

真理

兄貴、ネクタイそれ、シャツに全然あつてないっすからこつちに替えてください。

龍治

いいよこれで、俺は結構気に入ってるんだから。それにこの後はラジオだろ、顔が見えるわけでもないだし。

真理

ダメですよ(龍治のネクタイを替えながら) パーソナリティーの三野文太、ゲストのファッションにはうるさくて、ちよつとでもおかしなところがあつたら次の

週の放送でボロクソに言うんですよ。

龍治

言いたい奴には言わせておきやあいいじゃないか。

真理

だから兄貴は甘いんですよ。三野文太は毒舌が売物だけど、あれで結構主婦層には支持されてて、影響力は絶大なんですよ。敵にまわすより味方につけるですよ。

龍治

そんなもんかね。

真理

ほら出来上がり、どうです。

龍治

(ネクタイを触りながら、鏡を見る仕種) あれ、なるほど、全然違うよ。

真理

当然です。

西野

(上手から出て) 龍治さん、お車の準備できました。

龍治

ありがとう。ようし、気合いを入れて、(真理に両手を差し出し) ギブミーファイブ、(真理と手を打ち合う) ハイファイブ。

龍治

いくぞ、修。

真理

兄貴、ついてくぜ。

(二人下手へ退場。この後ブルー転換)

第五幕

とある撮影スタジオ。シルエットになったカメラマンと助手が撮影の準備をしている。下手の袖の中がスタジオのホリゾンという設定。助手は下手のスタジオと舞台面を行き来しながらセッティングをしている。舞台明るくなる。

カメラマン

やっぱりバックのサベージ、ブルーで正解ね。絞りいくつ。

助手

ちよつと待ってください（露出計を使って持って下手に消える。ストロボの光が発光して、助手の声）五六の八です。

カメラマン

さっきと変わらなしね。左のフレンチ、少し首下げてみようか。それでもう一回計ってみて。

助手

はい（一拍置いてストロボ発光）

真理

（上手よりコーヒーを盆にのせて登場）コーヒーはいりましたから一服して下さい。

カメラマン

あら、嬉しい、修ちゃん気が利くよね。

真理

いいえ。龍治さんの分は向こうに出しましたから。

カメラマン

あそう。ほら、あなたも呼ばれないさい。

助手

(下手より登場)すみません(コーヒーをもらって飲む)

カメラマン

あくやっぱり美味しいわね。コーヒーはちゃんとドリッップしないと。私缶コーヒーは苦手なのよ(撮影用の缶コーヒーを手に取り)特にこのサンタモニカマイルド、甘ったるくて飲めないんだから。

真理

スポンサーが聞いたら怒りますよ。

カメラマン

大丈夫、あの人たちは商品さえ売れりやそれでハッピーなんだから。ポスターは最高の仕上がりにしてみせるわよ。でも、駅張りなんかは龍治ちゃん人気ですぐに盗まれちゃうと思うけど。

真理

とにかく、轟龍治の一番いい顔撮って下さい。

カメラマン

分かっているわよ。さて予定より随分早いけど、最後のカットやつつけちゃおうかな。龍治ちゃん着替えたかしら。

真理

呼んできます。(上手に走って消える)

カメラマン

絞り変わった?

助手

両方八です。

カメラマン

よっしゃ、

真理

(上手より登場) オッケーです。

龍治

(龍治、続いて登場) お待たせ。

カメラマン

龍治ちゃん、このカットで最後だから。

龍治

本当、じゃあ今日は久しぶりに早く帰れるな。この後は何も入ってないよな、修。

真理

何も入ってないっす。

龍治

ようし頑張るか(真理から缶コーヒを受け取り、下手の袖に消える)

カメラマン

(カメラマンより少し上手に控える、助手と真理)

いい? いくわよ、ハイ、(ストロボが光る) ハイ、いいねわ、ハイ、いいわよ、ハイ、

真理

待って下さい。

龍治

どうしたんだ、修。

真理

右側のストロボ、少し暗くなったような気がするんですけど。

カメラマン

ええ、(助手に) 計り直してみて。

助手

(下手の袖に消え、声) あ、四に落ちてます。

カメラマン

ええ(ストロボをチェックして) ちよつとちよつと何やってんの。パイロットランプ見てなかったの。スレーブが壊れてて、一灯発光してないのよ。修ちゃん
が気づいてくれてなかったら、このカット、パーになってたわよ。

助手(声)

すみません。

カメラマン

スレーブ、交換。

助手(声)

はい、(しばらくしてストロボ発光)

カメラマン

修ちゃんありがとう、よく気がついたわね。

真理

いいえ、たまたまです。

カメラマン

本当助かった。

助手(声)

八になりました。

カメラマン

よし。じゃあもう一度、いくわよ。あ、いいわねそれ、ハイ、ハイ。じゃあくるりと回って、ハイ、いいよ、ハイ。じゃあ少し上目遣いに、ハイ、やつぱり眼がステキね、鋭い感じ、ハイ、ハイ。じゃあ今度は日本中のファンを魅了するCM

のあのポーズ決めてみてよ。ハイ、ハイ、龍治ちゃんの甘い微笑み、ハイ、ハイ、そう、そう、ハイ、グーよグー、ハイ、ハイ、いいわ、いいわよ、ハイ、ハイ、ハイ、最高く、ハイ、ハイ、ハイオッケー、お疲れさま。

龍治 (下手より登場)お疲れ、

真理、助手 お疲れさまです。

真理 俺、タオル持つてきます。(走って上手に消える)

カメラマン (龍治に真理のことを) あの子使えるわね、感心しちゃう。よく働かし、気が付くし。小さいのにガッツがあるのよ。

龍治 ええ、ちよっと変ってるけど、本当によくやってくれますよ。あいつのおかげでチャンスも掴めたし(真理タオルを持つて上手からでてる。龍治気付かず続ける) 修は、俺のいい相棒です(真理ガッツポーズ)

真理 はい、兄貴。(タオルを渡す)

龍治 (汗を拭きながら) 修、今日は珍しく早く終わったから、飯でも食って帰るか。

真理 やった〜。

龍治 (機材を片付けているカメラマンに) 良かったら一緒にどうです。(真理、落胆)